

大阪府箕面市教育委員会

【総人口】139,259人（令和6年3月）

【自治体 関連URL】<https://www.city.minoh.lg.jp/sinfancy/center2.html>

【主担当部局】箕面市教育委員会保育・幼児教育センター
（幼児教育担当）

【主な関係部局】

保育幼稚園総務室（公立幼稚園・保育所担当）

保育幼稚園利用室（私立幼稚園・民間保育園担当）

学校教育室（公立小学校担当）

	幼稚園（幼稚園型）			保育所		幼保連携型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	0	4	5	3	26	0	3	0	14	1
園児・児童数	0	114	834	357	2,019	0	529	0	8,766	391

箕面市



事業実施地域・
協力園校

【実施地域】

萱野地域（モデル地域）

【協力園校】

幼：公立幼稚園 保：公立保育所 小：公立小学校

架け橋期の
カリキュラム開発
会議

【会議委員人数】 11名

【開催数】 4回

【委員属性】

委員：大学教授1名、公立幼稚園長2名、公立保育所長1名、民間保育園長1名、私立認定こども園長1名、公立小学校長1名、保護者3名、市教育委員会事務局（部長級1名）

架け橋期の
コーディネーター等

【配置人数】

1名

【経歴】

・大阪総合保育大学 教授

架け橋期の
カリキュラム

【開発主体】

萱野地域（1公立幼稚園、1公立保育所、1公立小学校）

近隣小学校区（1公立幼稚園、1私立認定こども園、1民間保育園）

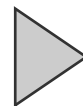
カリキュラム開発会議

カリキュラム開発会議

本会議は、「架け橋期カリキュラム」を社会に開かれた教育課程にするため、公立幼稚園・保育所、民間保育園・認定こども園、公立小学校、学識経験者、保護者などのさまざまな立場のかたで構成されており、各立場から意見を聴取する場として設置した。

主な議論の内容

- ① 架け橋期カリキュラム（素案）の開発について
- ② 就学前施設と小学校それぞれの工夫について
- ③ 架け橋プログラムについて



方針

- ① カリキュラムにおける「共通の視点」を決定
意見に沿った内容のブラッシュアップ
活用できるカリキュラムにするための事例集の作成
- ② 施設見学及びその内容について語り合う場の設定
- ③ おたよりをモデル地域の保護者に配布

【成果】

- ・就学前保育・教育施設、小学校、保護者、学識経験者から意見を聴取することで、社会に開かれたカリキュラムを作成することができた。
- ・会議を通じて、幼児期の活動が教科につながっていることについて委員の理解を深めることができた。
- ・会議に出席し、それぞれが行う活動の工夫を知ることで、保護者から子どもへの声かけについて変化があったと意見が聞けた。
- ・それぞれの教育活動を、架け橋の視点を取り入れて見直すことができた。

【課題】

- ・施設によって架け橋期の取り組みの意義や必要性について、温度差があること。
- ・施設種別によって、業務におけるピークタイムの違いによる会議時間の調整が必要なこと。



会議の様子

架け橋期のカリキュラム

開発プロセス

開発プロセスは3年計画で策定。1年目「土台づくり」2年目「カリキュラム（素案）」3年目「カリキュラムの完成・全市域への展開」である。

本市では、会議体として、架け橋期カリキュラム開発検討会議を設置し、この会議体を主体に協議を行っている。この会議での意見をもとにカリキュラム作成や相互理解を深める取り組みをすすめた。カリキュラムの作成には、活動の中身を語りあう場が必要なため、架け橋期カリキュラム開発検討会議に出席している校園所の職員で構成される「ワーキンググループ」を設置し、職員同士が語り合う場を設定することで相互理解を深めた。

カリキュラムの開発にあたっては「意見交換⇒実践⇒再検討⇒検証」というPDCAサイクルを回し、ブラッシュアップを行っている。



幼保小合同研修会

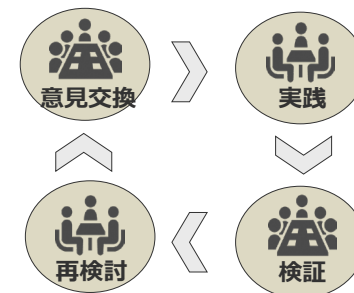


ドキュメンテーションの様子



ワーキンググループの様子

開発サイクル



ポイント

- ・施設種別の垣根を越えた会議体の設定
- ・開発検討会議とワーキンググループの役割分担（方針決定と実作業）
- ・ドキュメンテーションワークや事例検討による教育活動の「見える化」
- ・合同研修会の開催

課題

- ・施設種別によって会議可能な時間帯が異なる

課題解決に向けて実践したこと

- ・施設種別によって会議可能な時間帯が異なる。
 - …録画した教育活動の様子を元にその中身について意見交流を実施。
 - ①見てもらいたいところに照準を合わせることができ、効率的な施設見学ができた。
 - ②見学する側・される側のスケジュール調整を行う必要がなくなった。

架け橋期のカリキュラム

カリキュラムの概要と実践

本市では、箕面っ子の「豊かな育ち」と「確かな学び」を接続するため、学校見学や１年生を迎える会など既存の交流活動となる「連携」を維持しつつ、幼児教育から学校教育への連続性や一貫性を保障し、教育課程をつなげる「接続」の要素を取り入れ、その両立をめざしカリキュラムの開発を行う。

【架け橋期カリキュラムの工夫した点】

- ・ 架け橋期の２年間をおおむね半年ごとに分けて記載。
特に、子どもにとって変化の大きい入学当初（４月）は、配慮事項が多いことから別に記載した。
- ・ 様々な支援や配慮を要する（特別支援教育、外国にルーツをもつなど）子どもについての事項を明記した。

【架け橋期カリキュラムの実践により変化した点】

- ・ （就学前施設）小学校での教育活動を見通した活動の展開
…小学校教育の前倒しではなく、幼児期だからこそできる活動に「学びの芽生え」があることを再認識
子どもの気付きや子どもの姿から始まる活動の展開。子どもが夢中になって遊び込める時間や環境の保障など
- ・ （小学校）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識した授業の展開
…幼児期の学びに積み重ねていく意識や子どもへの言葉かけの変化
すべてゼロから教えるのではなく「こういうときどうしてた？」「こういうのしってる？」と子どもたちに確認

次年度への展望

【次年度への展望】

- ・モデル地域では、これまでの活動を引き続き実施し、検証結果を反映させた「架け橋期カリキュラム」を完成させる。
- ・完成した「架け橋期カリキュラム」をモデル地域外へ周知し、地域の実情にあわせた持続可能な展開について検討する。
- ・幼保小接続にかかる研修の開催にあたっては、保育者と教職員が語り合う場を設ける。
- ・架け橋期カリキュラムの開発・実践・評価に係る取組内容を研究成果として、市ホームページに掲載する。

【令和5年度の成果】

- ・市内全ての就学前施設や小学校等を対象に架け橋期に係る研修会を計4回開催。研修会を通じて、市内の就学前施設や小学校に対し、本市では文部科学省の幼保小の架け橋プログラムの採択を受けたことを周知するとともに、「架け橋期」の取組みの意義や重要性を啓発した。小学校から、研修を受講したことで就学前に培われた子どもの力を生かして、自らの教育課程を顧みることができた、今後も幼保から学んだ工夫を実施していきたいとの意見をいただいた。
- ・ワーキンググループは計8回実施し、架け橋コーディネーターである瀧川教授から指導・助言を受けながら、事例検討やドキュメンテーションワーク、意見交換等をすすめ、教育活動の相互理解や架け橋期の教育の意義についての共通理解を深めた。
- ・架け橋期にあたる幼児教育と教育について、モデル地域の小学校、就学前施設の施設見学を2回ずつ実施しワーキンググループが参加した。
- ・架け橋期カリキュラム開発検討会議では、カリキュラムの内容やワーキンググループの活動報告について、関係性ができる前の令和4年度と比較して、活発な意見交換がなされるようになった。
- ・ワーキンググループの所属園所の協力のもと、5歳児の保護者に対して「入学にむけて気がかりなこと」についてヒアリングを行った。ヒアリングを行った園所の保護者に向けて、小学校からの返答メッセージを含むお知らせを萱野小学校の入学説明会で配布した。

【令和5年度の課題】

- ①施設によって架け橋期の取り組み意義について、理解度に差があること。
- ②施設種別によって、業務におけるピークタイムの違いによる会議時間の調整が必要なこと。
- ③架け橋期の取り組みを保護者へ周知する方法や内容について、検討が必要であること。
- ④本市において、民間園の割合が増加していることから、民間園を含めた市内全域への展開方法について検討が必要なこと。